

厳島神社の弁財天信仰の成立とその性格

松井輝昭

はじめに

本稿では、厳島神社の弁財天信仰がいつどのように成立したのか、その性格をいかに考えたらいのかについて検討する。

厳島神社は戦国時代の後半において、「弁財天の霊場」としてその名前が全国的にも知られていたようである。僧万年が永禄年中（一五五八〜七〇）に將軍足利義輝の使者として豊後の大友氏のもとに赴いたとき、厳島に立ち寄って「弁財天女の霊廟に拝謁し」、その喜びを漢詩に作り奉納している（『芸藩通志』）。また、島津家久が天正三年（一五七三）三月に上京したおりに、厳島神社に参拝し「さて本社弁財天にてまします」と書き残す（「中書家久公御上京日記」）。これらのことから戦国時代後期には、厳島神社の本社が「弁財天女の霊廟」として崇められていたことが分かる。なお、宮島の観光案内をも兼ねた「厳島絵図」は、江戸時代後・末期に何度も板行されたが、大宮の祭神に触れた画中の説明文で以下のように述べる。

本社大宮齋ひ奉ル神市杵島姫命を主とし、相殿二五社已上六座、外二弁財天の像を安置す

このことから江戸時代後・末期においては、弁財天（女）と称された像が神々とともに本社の内陣に祀られていたことが分かる。また、厳島神社が弁財天の霊場として参詣客を集めていたことも知られる。しかし、厳島神社が弁財天の霊場として知られていたことが初

めて確認できるのは、大内義隆が天文五年（一五四七）二月付けで朝鮮に送った書状であり、次のように記されている（「大願寺文書」三二三）。

某社を厳島と号し、弁財・多聞両天を安んず。社主として年代深遠なり（読み下し）

ここでは厳島神社に弁財天と多聞天（毘沙門天）が祀られているとあるが、後代の例に倣えば本社には弁財天が、客人社には多聞天が祀られていたことになる。だが、これに続けて弁財天と多聞天がこれらの神社の祭主になったのは遠い昔で、いつことが分らないとも述べられている。

ゆえに、厳島神社は遅くとも戦国時代前期には弁財天の霊場となっていたが、その始まりは昔のことでは不明といわざるをえないことになる。ところが、不思議なことに戦国時代の厳島神社の神事・祭礼を細かく尋ねても、弁財天の祭りに当たるものを見出すことができない。なお、鎌倉時代末期の文保二年（一二三二）に成った『漢嵐拾葉集』に、厳島神社は紀伊国の天川弁財天に次ぐ日本第二の弁財天であると記されているが、このうち当社と弁財天を直接つなぐものは何も見出すことができない。以上のように、厳島神社の弁財天信仰の始まりは闇の彼方にあり、その性格も曖昧なものであるといわざるをえない。しかし、厳島神社は戦国時代以降も弁財天信仰の霊場としてあり続け、多くの参拝者を集めてきたことが知られるから、これらのことは容易に解けない難問といえよう。

この疑問を解決する手掛りを得るため、次の手順で検討を加えることにする。まずは、(1) 巖島神社の弁財天信仰について研究史の整理を行い、この信仰がいつどのようにして始まったのか見通しを得る。次は、(2) 祭神が弁財天と見なされる前段階とされる龍神信仰が、巖島神社でいつどのように台頭してきたのかを検討する。最後に、(3) 巖島神社における龍神信仰から弁財天信仰への転換時期とその契機について探る。さらに、以上の検討結果を踏まえて、巖島神社の弁財天信仰に関する残された課題についても整理する。

一 巖島神社の弁財天信仰に関する研究史

喜田貞吉氏はつとに大正八年(一九三〇)の「弁財天女考」のなかで、巖島神社における弁財天信仰の始まりやその契機についても言及している。弁財天信仰は平安時代中頃に竹生島で始まっているが、これに比べると「巖島も頗る新しい」と述べる。また、『臥雲日件録』文安四年(二四四七)四月十七日条に見られる、座頭が語ったという巖島縁起について検討したうえで、巖島大明神はこの頃にすでに弁財天と習合しているとの理解を示す。喜田氏がこのように結論付けたのは次のような理解に基づく。巖島大明神は推古朝に美婦人の大蛇を勧請したと伝えられており、また巖島神社の回廊が大蛇のとぐろを巻いている姿と考えられているが、この回廊を大蛇と見なすこと自体がすでに弁財天信仰を示すという。なお、喜田氏は巖島神社で弁財天信仰が始まった契機にも触れ、その契機として以下に掲げる三つの要件が考えられるという。まず、室町時代になると上方では弁財天信仰が盛んになり、それが瀬戸内海にも広がっていったと考えられる。次に、巖島神社の祭神も竹生島と同じ女神であって、「市杵島姫命」とも称されていた。さらに、巖島神社と竹生島は社殿が島のうえ建つという共通性があったので、弁財天信仰が「いつしか」巖島神社にも根付き栄えるようになった。巖島神

社の弁財天信仰の在り方を考えようとするとき、このような理解は非常に示唆に富むものといえる。

松岡久人氏も喜田氏と同じく座頭の語る巖島縁起を取り上げて、巖島神社と龍神が結び付つていることを確認する。ただ、この縁起には「弁財天」という表現が用いられていないことに注目し、巖島神社の弁財天信仰の始まりを戦国時代前期まで引き下げるべきであるとの理解を示す。また、巖島神社で龍神信仰が見られるようになった理由について、次のような二つの要件があることを指摘する。まず、社殿が海にせり出すように建っていることから、龍宮につながっているという連想が生まれる。次に、昔より弥山で繰り返されている雨乞い神事から、祈願の対象となる龍神のことを思い浮かべる。以上のことを踏まえたうえで、巖島信仰が室町時代の前期には浄土往生から現世利益へと大きく変化し始めていた、これは庶民信仰の在り方と社家三方の神社経営の思いを反映していると指摘する。松岡氏の所論は必ずしも整合的に組み立てられているとはいえない。しかし、巖島信仰が室町時代の前期には浄土往生から、現世利益へと大きく変化し始めていたというのは、福德の神弁財天信仰が巖島神社に根づく背景として重要であろう。ところが、このような変化は庶民の救済観が変わっただけでなく、社家三方の神社経営の必要性に基づくとも説いている。そうすると、巖島神社における弁財天信仰の始まりは、彼らの主導によることにならざるをえない。この点は巖島神社に弁財天を祀る神事・祭礼がないことから疑問とせざるをえない。また、史料のうえで「弁財天」という表現が確認できるか否かで、巖島神社の弁財天信仰の始まりの有無を議論するのも適当とはいえない。

笹間良彦氏も巖島神社の弁財天信仰の始まりに触れている。巖島神社の弁財天信仰は主神である市杵島姫命を、弁財天と見なすことで始まったという。そして、巖島神社は弁財天を祀る神社であると認識が広がっていき、やがて弁財天が同神社を代表するものと考

えられるようになったと指摘する。しかし、厳島神社に弁財天が祀られているのは、「俗信」というレベルでひろがったものとされる。

なお、笹間氏は厳島神社の弁財天信仰が始まった時期について明言されていないが、弁財天が「蛇」と広く考えられている例証として『太平記』の記事を引いている。この頃以降に厳島神社でも弁財天信仰が広がったと理解しているようである。なお、笹間氏の指摘のうちで最も重要と思われるのは、厳島神社の弁財天信仰は「俗信」として広がったという見方である。厳島神社では弁財天を祀る神事・祭祀が確認できないから、おそらくこの見通しは的をのんでいるだろう。しかし、厳島神社の主神市杵島姫と弁財天が容易に結び付くとの理解は検討を要する。

以上、喜田・松岡・笹間の説はニュアンスを異にするものの、厳島神社の弁財天信仰の始まりを南北朝時代もしくは室町時代以降と考えていることが分かる。

ところが、田中貴子氏の理解は喜田・松岡・笹間の三氏とは大きく異なり、弁財天は平安時代末期に厳島神社とつながったと結論する^⑤。この田中氏の考えは次のような三つの要件を前提にしているように思える。竹生島では十二世紀に弁財天信仰が定着しているが、これには天台僧が関わっていると考えられる。十四世紀前期に天台僧が著した『溪嵐拾葉集』では、厳島神社も「日本三弁天」「六所弁財天」の一つとして紹介されている。また、十四世紀以降の天台宗寺門派の資料には、「厳島の神」がしばしば登場する。この田中氏の理解に従えば、厳島大明神が弁財天と習合しその霊場となる過程では、古来より厳島神社と深い関わりがあった天台宗の僧、取り分け園城寺の僧侶が大きな役割を果たしたことになる。厳島神社の神事・祭祀は明治初年に神仏分離令が強制されるまで、天台宗系の祭が続いていたことは事実なので、田中氏の見通しは的を射たものといつてよいであろう。しかし、園城寺系の僧侶が厳島神社に弁財天信仰が伝わるに際して大きな役割を果たしにしろ、このこ

とが直ちに十二世紀から厳島神社に弁財天信仰が根付いていたことにはならないだろう。田中氏の所論は一面では魅力的であるけれども、厳島神社で弁財天信仰が根付くうえでの手続論が欠落しているように思われる。なお、伊藤聡氏も『溪嵐拾葉集』に厳島神社などの著名な弁財天信仰の霊場の名前が挙げられていることを踏まえ、鎌倉時代末期には全国的に弁財天信仰の拠点が生まれていたと述べ^⑥。しかし、伊藤氏はその一方で、日本の弁財天信仰は宇賀弁財天と習合することにより、龍蛇信仰としての性格を濃厚に持つようになったとも指摘する。ただし、この理解を厳島神社に当てはめて考えると、さきの伊藤氏の理解とは異なった結論になるように思われる。つまり、厳島神社は少なくとも南北朝時代の後半以降になって、妙音弁財天から宇賀弁財天へと大きな性格転換があったということである。田中氏が考えた厳島神社の弁財天信仰は、妙音弁財天をもって当神社を代表させていたのだろうか。ゆえに、厳島神社の弁財天信仰について検討するとき、それが妙音弁財天の信仰か否かの違いにも配慮すべきである。

かくして、厳島神社の弁財天信仰の成立時期を明らかにするうえで、二つの記事の解釈がその時期設定を左右していることが分かった。一つは天台僧光宗が著した『溪嵐拾葉集』の関係記事であり、これが実態を反映したものならば厳島神社の弁財天信仰は鎌倉時代後期以前に始まったことになる。いま一つは禅僧瑞深周鳳が著した『臥雲日件録』で取り上げられた厳島縁起であり、この記事から読み取れる龍神信仰を弁財天信仰と同じと見なすか否かで判断が分かれる。しかし、これら二つの書物のいずれの記事についても、その解釈が容易でないことは従前の検討で明らかである。

そこで、最初に、厳島神社の弁財天信仰の前史とされる龍神信仰が、いつごろから台頭し定着したと考えられるかについて検討する。

二 龍神信仰が台頭してきた時期

厳島神社は戦国時代の後半頃になると、弁財天の霊場として広く知られるようになっていた。また、厳島神社では弁財天のための神事・祭祀が行われていないため、その信仰の在り方は曖昧で間接的なものであったと考えられる。ゆえに、まずは厳島神社の祭神が化身して龍神の姿となる、つまり「蛇体」と見なされるのはいつかを検討する。厳島神社の縁起の一つである「厳島の本地」の最古本、貞和二年（一三四六）に作成された絵巻には、まだ「いつくしま大みやうじん」とだけある。後代に著わされた「厳島の本地」の異本になると、この表現が「シヤウジンノ弁才天」と書き改められている。ゆえに、厳島神社でも少なくとも南北朝時代前半までは、その祭神を蛇体の龍神と見なすようなことはなかったと考えてよいであろう。

ところが、さきに見た『臥雲日件録』の厳島縁起よりもまえに、厳島神社と龍神信仰の関わりが窺える記事がある。これは今川了俊が応安四年（一三七一）七月二十日に厳島に訪れたおりの記事である（『みちゆきぶら』）。

さてまかり申し侍て、御前のはま漕出で、仏舍利二粒（東寺・葉室）、うみに入たてまつりぬ、このたびの祈なるべし、（中略）いつらを潮の満干も通ひせんとおほゆる海中にこの鳥も侍るなりけり、まことにうみの宮このあるじの御座所とおぼえて、この世の中ともみえ侍らず、かへりてすさまじきまぞおほえし、

まず、厳島神社の参詣を終えて宿营地である「さえき」（廿日市）に戻るとき、神社のまえの海に仏舍利二粒を投供したというのである。さらに、このように仏舍利二粒を投供した目的は、「このたびの祈なるべし」とも書き添えている。しかも、このあとの記事では今川了俊の麾下に従った軍勢を載せた船が、遠く九州に向って航行

している様が描かれている。ゆえに、今川了俊が「このたびの祈」といつているのは、海の主である龍神に対して軍勢を乗せた船の航海安全を祈念したものと考えられる。では、今川了俊は軍勢を乗せた船の航海安全を祈念するにあたって、なぜ厳島神社のまえに仏舍利を投供したのであるのか。さきの記事の後半部分では厳島神社が、「うみの宮このあるじの御座所」と述べている。これは厳島神社の沖に龍神の王宮である龍宮があり、当神社もその一部と見なされていたからではないだろうか。南北朝時代の後半の安芸国においては、厳島神社の沖に龍宮があると考えられていたものと推測できる。なお、吉田兼右がこののち二百年あまりのちに写した「厳島社家縁起」の追記にも、「厳島重々秘所七所之次第」として、次のような記事があるのが知られる。⁸⁾

第一鳥居ノ御前之海底ニハ蓬莱在之、

この記事にある「蓬莱」という言葉を、「龍宮」と読み替えるのは容易であろう。大鳥居のまえの海に龍宮があるという考えは、戦国時代に至ってもなお伝承として残っていたことになる。なお、江戸時代末期でも大鳥居のまえの海上から、正月元日より三日もしくは五日まで「龍灯」が浮かび出るとされた（『芸藩通志』）。これも大鳥居のまえの海に龍宮があるとの伝承と密接に関わる現象といえよう。ゆえに、厳島神社は南北時代の後半においてすでに、龍王もしくはその娘龍女の館と考えられていたことが分かる。

以上のように考えることができれば、今川了俊が述べている内容も不思議ではなくなる。ここで『臥雲日件録』の厳島縁起に見られる該当箇所を次に掲げ、その意味するところを少しく検討することにする。

明神の縁起をほほ知る、昔推古天王の御宇、一美人船に乗りて来る、（中略）婦人遂に化して大蛇と成る、いわゆる百八十間の回廊の形、けだし大蛇蟠屈を象るなり、（中略）俗に伝う、明神に新夫・旧夫あり、旧夫すなわち弥陀垂迹、

新夫すなわち毘沙門垂迹なり、明神（法会の）公闡のうちに、新夫の廟に到る云々、（書き下し）

この記事に従えば厳島神社の回廊は室町時代の前期になると、大蛇が「とぐろ」を巻いている姿と考えられていたことが分かる。これは世俗の人々が厳島神社を蛇体と重ね合わせて了解していたことになむものである。すでに喜田貞吉氏が説いているごとく、厳島神社にも龍女信仰の裏面としての弁財天信仰、つまり宇賀弁財天の信仰が伝わっていたと考えることができるかもしれない。なお、俗伝として書き添えられていた厳島大明神の「新夫・旧夫」論も、同神社の福神信仰の広がりを示すものとして興味深い。かつて厳島大明神と夫婦であった阿弥陀如来は、中世前期までの来世往生の願いを叶える仏を指す。また、弁財天の新夫になった毘沙門天の場合、福徳の神として中世後期になると信仰を集めるようになったことが知られる。そして、厳島大明神の「新夫・旧夫」論が多くなると信じられていたとすると、厳島神社では室町時代の前期には来世往生から現世利益へと世界観の転換が起こっていたことになる。少なくとも、室町時代の前期の厳島神社ではすでに、弁財天信仰につながる福神信仰が優勢になっていたと考えられる。あるいは、厳島神社の祭神が龍神と考えられていただけでなく、すでに弁財天信仰の霊場としての装いを持ち始めていたといえるかもしれない。しかし、『臥雲日件録』の厳島縁起には「弁財天」という表現が全く用いられていないので、この記事のみで厳島神社の弁財天信仰の始まりを云々するのは慎重であるべきだろう。

厳島神社の龍神信仰について、多少し検討を加えようとする。次のような内部情報があることに気付くであろう。まず、天台宗の中心の聖典である五部大乘経は、南北朝時代前期まで宝蔵には一部しか所在が確認できない（『野坂文書』三四〇）。ところが、このうち室町時代前期にかけて数十年のあいだに、神社蔵の五部大乘経はなぜか六部にまで急増している（同上三七三）。なお、かつて厳島

神社に寄進された五部大乘経のうち、今日に伝わるものは平安時代末期に書写され宝蔵に収められていた紺紙金泥経一部のみである。この他の経巻は室町時代後期に造られた「龍宮界蔵」に移されたのち、明治初年の神仏分離の嵐のなかで散逸することになったと考えられる。いずれにしろ、厳島神社では南北朝時代の後半以降になると、なぜ多くの経巻が寄進されるようになったの未解決の問題である。これは室町時代後半になると多くの経巻を収めるため、「龍宮界蔵」という名の輪蔵が造られたことから類推できるように、厳島神社を龍宮もしくは龍女の屋形と考える見方が広がったことになむものと思われる。次に掲げる『溪嵐拾葉集』の一文から知られるように、経巻を龍宮に収めるといふ考えは古くから存在していた。

龍神とは水神なり。故に大海にいる。教法とは言説風大の用なり。風大また水大の用なり。その化用を留めるとき、水大の本源に帰るなり。よつて、仏教滅ぶとき、必ず龍宮に収めらるなり云々、（書き下し、以下同じ）
（弁天部秘決）

これは単に一例に過ぎないけれども、厳島神社に多くの経巻が寄進されたのも、その背景にはこのような教えがあり信じられていたものと考えられる。今川了俊が厳島神社のことを「うみの宮このあるじの御座所」と述べたごとく、南北朝時代後半以降になると厳島神社のことを「龍宮」とみなす考えが広範に見られたといつてよいだろう。

かくして、南北朝時代後期から室町時代前期にかけて、厳島神社では龍神信仰が台頭し優勢になっており、その後には弁財天信仰が広がる準備が確実になされていたといえる。ただし、ここでは厳島神社の祭神を龍宮の主、龍王とする見方が一般的であり、祭神を龍女と見なすことが少ないのは気にかかる。しかし、厳島大明神は昔から女神と考えられてきたわけだから、龍王を龍女に読み替えることは容易であったと思われる。

三 龍神信仰から弁財天信仰への転換

天台僧光宗が鎌倉時代後期に著した『溪嵐拾葉集』では、既述のように厳島神社のことを「日本三弁天」「六所弁才天」の一つとして紹介する。厳島神社は鎌倉時代後期には全国有数の弁才天の聖地であったというのである。なお、光宗は厳島神社についてその一方で、安芸厳島の「三箇秘事」として次のように述べている。

それ厳島大明神は姿迦羅龍王第二女なり。五十種の誓願を發す。そのなかの三箇大願は、第一無上菩提、第二智慧、第三福德なり。もし人あり我が宝前に詣でて、この三箇大願果遂せざれば、正覚を取らず、
〔弁天部末 私廟〕

この記述によれば厳島神社の祭神は姿迦羅龍王の娘となっており、平安時代末期以来の理解がそのまま踏襲されていることが分かる。なお、祭神である龍女に「五十種の誓願」があったというが、これに由来するかは不明である。あるいは、『法華経』『提婆達多品』に描かれる女人往生譚からの連想かもしれない。そして、龍女である厳島大明神には「無上菩提・智慧・福德」という三箇大願があり、参詣するものは誰でもその願いが叶うともいう。『溪嵐拾葉集』の他の箇所には、これと関わる以下のような記事も掲げられている。

神道六波羅蜜の事。第一に檀波羅蜜の神とは、稲荷・厳島・竹生島等なり。皆施福の神なる故なり。第二に尸波羅蜜の神とは、八幡・北野・天神等なり。不妄語をもって本となす。
〔真言秘奥抄〕

厳島神社の祭神は稲荷大社・竹生島明神と同じく、いずれも「施福の神」という性格を備えているというのである。また、弁財天に触れた『溪嵐拾葉集』の記事においては、次の記事の後半の文言と同趣旨の文章が繰り返されている。このことも看過できない要件といえるであろう。

紀州吉野天川は地藏弁天なり。日本第一の弁財天。第二厳島

は妙音弁財天なり。第三竹生島は観音弁財なり云々。また云う。今天川・厳島・竹生島、三所穴互通し、三弁宝珠、一体互融せし。はなはだ甚深なり。
〔弁天部末 私廟〕

『溪嵐拾葉集』に取り上げられているこれら三つの記事によると、厳島神社は十四世紀の前期以前から「福德の神」としても知られ、日本を代表する三大弁財天の一つとして広く認知されていたことになる。しかも、これら三大弁財天の龍穴が互通しているだけでなく、宝珠までも互いに融通しあう関係にあったというのである。かくして、日本三大弁財天として知られていた天川・厳島・竹生島の弁財天は、龍穴が互いにつながっているだけでなく、宝珠までも共有していて一体不可分の関係にあったと理解されているのが分かる。このような考えが何に由来するのかその理由は不明であるが、背後にこの三者を結び付ける宗教勢力があったものと推測できる。つまり、天台宗系の修験者のネットワークが大きく広がっているだけでなく、また修験者の活動範囲も広範な領域に及んでおり、それがこのようなスケールの大きな発想を生んだのではないだろうか。以上のことを自明の前提として考えるならば、次のような新しい理解が生まれることになるであろう。竹生島では早くも十二世紀初頭に「弁才天信仰」を見出すことができるから、この信仰が厳島神社に伝えられたのもかなり以前ということになる。しかし、厳島神社では十五世紀の中頃でも、「弁財天」という言葉を見出すことができないうえに、厳島神社の弁才天信仰に関する記事が、どれほど『溪嵐拾葉集』のなかに綴られていても、それが現実を反映したものはいえないようにも思われる。ただ、『溪嵐拾葉集』の弁才天信仰の記事と厳島神社の関わりを考える場合、これを簡単に誤りと決め付けられないところが悩ましい。

むろん、厳島神社の祭神が女神であり龍女であるとの認識は、平安時代末期以来脈々と続いてきたわけであるから、弁財天信仰を前面に押し出すような一定の条件が調うことになれば、伏流していた

ものが顕在化することは十分にありえたとと思われる。なぜなら、『溪嵐拾葉集』に採り上げられた弁財天に関する教へのなかに、祭神の龍女が弁財天へと変身する論理が次のように用意されていたからである。¹¹⁾

龍女をもって弁財天と習うこと 示云。龍女すなわち如意輪観音なり。この本尊の本地また如意輪なり。よって一体の習いなり。また龍女宝珠をもってすなわち自証法門となす。この尊また宝珠をもって、三摩耶形となす。また、この尊に付して、三身を習うことこれあり。いわゆる南方の宝性尊は法身なり。如意輪観音は報身なり。龍女はすなわち応身なり。

この三身ともに、如意宝珠をもって、三摩耶形となすなり。この宝珠は境地冥合をもって本となす。〔弁才天法秘決〕龍女と弁財天と如意輪観音は姿や形が変わっても、三身一体であるということに変わりはないというのである。以上のように鎌倉時代後期の天台宗においてはすでに、龍女信仰が弁財天信仰に移行するための論理が用意されていたことが分かる。では、厳島神社で弁財天信仰が顕在化するためには、どのような条件が必要とされたのであろうか。

次は、厳島神社で弁財天信仰が顕在化していたと思われる、一つの事例を採り上げその在り方について考えることにする。吉田兼満が大永七年（一五二七）五月九日に書写した「仏説大弁財天女経」という経巻の冒頭に、「安芸ノイツク嶋大弁財天ノ祭文」との傍書が見られる。また、この経巻の末尾には、智福院宥日が前年七月十八日の夜に、「厳島大弁財天之霊夢」により感得したと書かれている。しかし、伊藤聡氏がつとに指摘しているように、この経巻で説かれる大弁才天の尊容は、長谷寺能満院などに蔵されている「天川曼荼羅図」と同じものである。¹²⁾ 修験が作成したとされるこの「天川曼荼羅図」は、本来は天川弁財天に関わるものといわざるをえない。また、この「天川曼荼羅図」の絵柄は、中世では一部でしか流

行しなかったともいう。¹³⁾ なお、問題の「仏説大弁財天女経」から傍書と感得の由来を取り除いたものが、江戸時代前期に真言宗の寺院で修法の一つとして用いられていたことが知られる。¹⁴⁾ そこで吉田兼満に「仏説大弁財天女経」を見せた智福院宥日とは何ものなのか、どうして吉田兼満書写の経巻に「安芸ノイツク嶋大弁財天ノ祭文」という傍書が付けられたのか、それはいつのことと考えられるのか改めて問題となるであろう。神仏分離後の天川弁財天の祭神は市杵島姫なので、この在り方を中世後期にまで遡らせられることができれば、「厳島大弁財天之御霊夢」という表現も一応は納得できよう。そして、以上のような理解が可能であれば、厳島神社の弁財天信仰は大永七年以前には顕在化していて、都あたりにもその風評が伝わっていたといえそうである。¹⁵⁾ 換言すれば、室町時代後期に作成された「天川曼荼羅図」の周知を計るため、このような曖昧な形で吉田神道の総帥兼満に伝えられ、その権威をも利用しようとしたのではなからうか。また、厳島神社の弁財天信仰はそれくらい宣伝価値を持っており、これを智福院宥日は利用して自分のところの弁財天を広めようとしたとも考えられる。なお、吉田兼満のもとに「仏説大弁財天女経」をもたらした智福院宥日は、江戸時代にも天川弁財天のまわりにあった塔頭寺院「地福院」の僧侶とも考えられる。以上、強引とも思われる推測を重ねてしまったが、吉田兼満が写し伝えた「仏説大弁財天女経」は、天文五年（一五四七）の大内義隆書状よりまえに、厳島神社の弁財天信仰が顕在化していたことが確認できる貴重な事例といえる。

では、厳島神社は室町時代後期以降において、何を契機としていっつ弁財天の霊場としての装いを持つようになったのであろうか。ここで笹間良彦氏が厳島神社の弁才天信仰の広がりについて、「いつしか」広がった、「俗信として」広がったと述べていることが印象深く思い出される。厳島神社の弁財天信仰が神事・祭礼をとまなわけない、「俗信として」広がったと考えられることは、すでに触れて

いるのでここでは割愛する。なお、厳島神社で弁財天信仰が顕在化するの、室町時代後期から戦国時代初頭までと考えるにしろ、それは「いつしか」としか答えようがない。それでは、厳島神社の弁財天信仰は何を契機として、顕在化することになったといえるのだろうか。孤島であった厳島にもこの数十年たらずのあいだに、大きな社会変革の波が押し寄せてきていた。社家が室町時代前半に厳島移住を終えたことは、このような動きが始まるうえでの魁といつてよいであろう。これは彼ら社家が従来のように本土にいて、土地からの収入に頼らざるをえない状況がなくなったことを意味する。

また、各地から厳島神社に参詣する人々も、三月と九月の大法会の際のみにてはなくなった。室町時代後期になると瀬戸内海交易は一層活況を呈するようになり、厳島も瀬戸内海を東西する廻船の分岐点の地位を占めるようになったのである。さきに取り上げた僧万年や島津家久の場合も、おそらくは船便を求めて厳島に立ち寄り、有名になっていた弁財天の靈廟を参詣したものと考えられる。このように厳島に立ち寄る人の流れは室町時代後期ごろから確認でき、戦国時代に入るとその数は飛躍的に増加していくことになったのである。連歌師光瑞は延徳二年（一四九〇）に厳島に立ち寄っており、このときに「浮海松の真砂に生る塩干かな」という一首を詠んでいる（『光瑞千句』）。また、瀬戸内海交易の東端にある堺南北の商人たちも、永正十二年（一五一五）三月の法会のおりに来島し、狩野元信筆の立派な絵馬を厳島神社に奉納したことが知られる（『厳島絵馬鑑』）。なお、「あきの宮島」の大野紹桃という人物が、永正十三年頃に都の著名な学者でもあった三条西実隆と消息を取り交わし、自作の歌を互いに送りあったことが知られる（『再昌草』）。次の一首は大野紹桃が三条西実隆に送ったものである。

都人にこれはといはぬ時もなし 行かふ船のしまのあけほの
この一首からも厳島と京都とのあいだの交流の盛んな様が窺える。
この時代に弁財天信仰を始めとする福神信仰の波は、厳島神社に何

度も押し寄せてきたものと推測できる。

ゆえに、福德を与える神としての厳島大明神の評判は、たとい誰かが作った「ウワサ」としての俗信であっても、時代の大きな流れのなかでそれに火がつけば、またたくまに広がる可能性は十分に考えられる。なぜなら、厳島大明神を龍女と見なす考え方がすでに定着し、厳島神社が弁財天信仰の霊場となりえる態勢はすでに整っていたからである。また、このような社会的状況だけでなく、厳島神社の場合は前述の『溪嵐拾葉集』の記事にあったように、次の三つの好条件がそろっていたことも忘れてはならない。

① 厳島大明神に「無上菩提・智慧・福德」という三箇大願があったが、このなかに福德の神としての要素が含まれている。

② 厳島神社の祭神は稲荷大社・竹生島明神と同じく、いずれも「施福の神」として知られていた。

③ 三大弁財天として知られる天川・厳島・竹生島の神社は、龍穴が互通し宝珠までも融通しあう緊密な関係にあった。

つまり、厳島神社は天台宗の世界においてすでに、弁財天の聖地竹生島と一体のものと考えられていたわけだし、竹生島と同じく孤島に立地し景観も非常によく似ているという好条件がそろっていたのである。したがって、誰かが厳島神社の祭神である龍女を福德の神弁財天と読み替えれば、無理なくこの切り替えは進んだことであろう。

なお、『溪嵐拾葉集』のなかでは、龍女と弁財天の関係について、次のようにも整理されていたことが想起できる。

龍女と弁財天と如意輪観音は姿や形を変えても、三身一体であるという。

しかし、厳島大明神の龍女から弁財天への読み替えは、瀬戸内海を東西する航路を媒体として、「ウワサ」として各方面にひろがったとすれば、その本地が如意輪観音か否かということはほとんど問題にならなかつたのではなからうか。

ゆえに、厳島大明神が福徳の神弁財天の装いを持つてくると、『臥雲日件録』の厳島縁起に見られた「新夫・旧夫」論にも、次のように新たな解釈がなされるようになったものと考えられる。つまり、女神である厳島大明神は毘沙門天だけでなく、新たに大黒天とも緊密な結び付きを持つようになったとする見方である。いつ頃から祀られているのか分からないけれども、弥山の毘沙門堂の横に今日も弁財天の石像が祀られている¹⁹⁾。戦国時代末期のキリシタンの書簡のなかに、大黒天の使者といえるネズミが本殿でうろついている様子が記されている²⁰⁾。これらの事例から考えると、厳島神社は毘沙門天・大黒天との結び付きを強めることで、福神信仰の一大霊場の装いを持つようになったと考えられる。しかし、厳島神社の神官たちはこれを表層的な生業と見ていたのか、すでに指摘したようにその神事・祭祀には全くといってよいほど反映されなかった。これもまた厳島神社の弁財天信仰の評判の大きさを考えると、まことに不思議な現象であるといわざるをえない。

かくして、厳島神社における龍神信仰から弁財天信仰への転換は、何かの契機があればそれが容易にできる条件が調っていたといえる。つまり、厳島神社と竹生島の弁財天社は祭神が女神という共通性だけでなく、教学的にも深いつながりのあることが知られ、さらに自然景観においても近似するという親近性もあったからである。なお、このような情況にあった厳島神社に新たな飛躍、変革の動きをもたらしたのは、室町時代後期以降における瀬戸内海交易の進展、瀬戸内海交易の分岐点としての厳島の地位の高まり、瀬戸内海交易を介した福神信仰の広がりであったといえる。そして、厳島神社が龍神信仰から弁財天信仰の霊場へと転換したのは、戦国時代の初期以前と考えることができる。また、弁財天とも考えられた厳島大明神は毘沙門天・大黒天とも結び付きを強め、厳島全体が弁財天信仰を中心とする福神信仰の霊場の装いを持つようになったと考えられる。しかし、厳島神社の弁財天信仰はあくまでも表層的な俗信

に留まったけれども、「ウワサ」という形で瀬戸内海交易を介して大きな広がりを見たということになる。

結びにかえて

古来、神仏の霊験が語られ霊場が生まれるとき、その霊験が何かを介して「ウワサ」の形でひろがり、多くの信者を集めるといっては世の常である。また、その信仰の在り方も曖昧で茫漠としていて、お祭りとは結びつかないことさえ少なからずあった。これまで検討した厳島神社の弁財天信仰も、決してその例外とはいえないであろう。厳島神社は戦国時代の初期には、弁財天信仰の霊場として広く知れわたっていたが、それはあくまでも俗信としての生業であったのである。

なお、これまで検討した厳島神社の弁財天信仰についての疑問で、どうしても解きえない問題が一つある。厳島神社では南北朝時代の後半以降になると、妙音弁才天から宇賀弁才天へと信仰の対象が変わったという考えである。鎌倉時代末期に著された『溪嵐拾葉集』に従えば、このような流れでしか考えることができない。しかし、南北朝時代前期までの厳島神社は菩提心発得の霊場として知られ、妙音弁才天であろうと弁財天信仰が広がっていた徴証を見出すことができない。また、厳島神社は天川・竹生島の弁財天とともに日本三大弁財天の一つに数えられ、龍穴を互通しているだけでなく宝珠をも互融していると、互いの親近性が語られているけれどもその手掛りは得られない。このような問題にあえて解決の糸口を見出そうとすると、次のような二つの考え方があふことに気付く。一つは、確かに、『溪嵐拾葉集』が綴っているような現実があったが、来世往生の思想が強くて顕在化しなかったという理解である。いま一つは、『溪嵐拾葉集』が綴っているのは教学を踏まえた理念であって、そのような現実が容易に見出すことができないという考えである。このいずれの解答についても、一方を否定するだけの勇気を持ち合

わせていない。ただ、『溪嵐拾葉集』が述べる現実について、何ら検証すべき材料がないこともその一つの答になるかもしれない。

註

- (1) 高橋修三「『巖島絵図』を読む」(『巖島信仰事典』、二〇〇二年、初出一九九一年)に収載されている「安芸州巖島之図」「芸州巖島図会」などの画中詞を参照する。
- (2) 喜田貞吉「弁才天女考」(『民族と歴史』第三卷一号、一九二〇年)。この喜田氏の論考には、巖島神社の弁財天信仰に関しても、その大きな流れだけでなく細かな史実も示されており、多くを学ぶことができた。
- (3) 松岡久人「中世の巖島文化」(『広島県史 中世』、一九八四年)。
- (4) 笹間良彦『弁才天信仰と俗信』、一九九一年。
- (5) 田中貴子「童女の妹―巖島の神をめぐる神仏関係と『巖島の本地』―」(『外法と愛法の中世』、一九九三年、初出一九九九年)を参照。しかし、田中氏は「貞和本」はテキストの性格が異なるとして、本書に「しゃうじんのべんざひてん」という文言がないことについて検討を省略している。なお、松本隆信「巖島の本地」(『巖島信仰事典』、二〇〇二年、初出一九九六年)もあわせて参照する。
- (6) 伊藤 聡「吉田文庫所蔵の弁才天関係儀へーについて―その翻刻と紹介―」(『むろまち』第二号、一九九三年)。
- (7) 註(5)の田中論文及び「巖島の本地」(横山 重外『室町時代物語集』第二巻、一九六二年)を参照。
- (8) 天理図書館吉田文庫所蔵『兼右卿御筆 巖島社家縁起』(吉田三七―〇六〇)参照。
- (9) 橋本章彦「毘沙門天と念仏―仏法守護神から福神へ―」(『仏教史学研究』第三三卷一号、一九九〇年)他を参照。
- (10) 神仏分離以前の宮島には、塔岡の下に二つの輪蔵があった。その北側にあったのが「龍宮界蔵」であった。「龍宮界蔵」は「何年また誰人の所建にや詳ならず。里老の口伝にハ、龍宮蔵をふるし」という。また、このなかに「一ハ宋板、一ハ朝鮮板」が納められていたとする(『巖島図会』)。この経蔵は天文十一年(一五四二)に建立されたいま一つの輪蔵、「転法輪蔵」より古いことは間違いない。
- (11) 山本ひろ子「成仏のラディカリズム―『法華経』龍女成仏の中世的展開」(『岩波講座 東洋思想 第一六卷 日本思想 2』、一九八九年)及び同「弁才天灌頂―戒家相承の弁才天と如意宝珠をめぐるて―」(『異神―中世日本の秘密教的世界―』、一九九八年、初出一九九九年)を参照。天台宗における弁財天信仰の教法的な理解に関しては、これらの山本論文から多くを学んだ。
- (12) 註(6)の伊藤氏の論文に同じ。
- (13) 註(4)の笹間氏の著書に同じ。
- (14) 高野山大學図書館蔵『大弁財天女経』(増福院文書六五―五一―)を参照。本史料の利用に当たっては、同館の木下浩良氏に御配慮いただきました。お礼を申し上げます。
- (15) 吉田兼満のもとに「仏説大弁財天女経」をもたらした智福院宥日が、私見のように天川弁財天の塔頭の一つ「地福院」の僧侶なら、巖島神社の弁財天信仰のことは都でも広く知られていたことになるであろう。
- (16) 註(4)の笹間氏の著書に同じ。
- (17) 松井輝昭「中世の瀬戸内海水運における尾道の位置」(『中世瀬戸内の流通と交流』、二〇〇五年)を参照。中世の瀬戸内海交易における西瀬戸内海の分岐点は、戦国時代以前は蒲刈あたりであった。しかし、戦国時代初め頃から巖島が蒲刈に取って代わって、各方面からの廻船の発着点となったと考えられる。いわゆる分岐点である。

(18) 註(3)の松岡論文に同じ。

(19) 宮島観光大使山崎美和氏より御教示いただき。お礼を申し上げます。

(20) 「二六〇七年度イエズス会年報」(チースリク編『芸備キリシタン資料』、一九六八年) 他を参照。この年報には厳島神社本社の拝殿であろうか、鼠が誰を恐れるでもなく無心に米を食べる様が描かれている。これは信者たちが厳島大明神に奉納した捻りよりこぼれ落ちた米であろうか、今からすると不思議な光景といわざるをえない。

Abstract

**Establishment of the Sarasvati faith Itsukushima Shrine
and the character**

Teruaki MATSUI

In this article, I examined establishment time of the Sarasvati faith of Itsukushima Shrine and the character and was able to clarify the following fact. There was dragon King faith to assume an enshrined deity a dragon woman for along time. Itsukushima Shrine, and this received a surge of the Fukujin faith after the latter period in the Muromachi era and switched it to Sarasvati faith to grant happiness and prosperity by in the early days for the age of civil strife. However, the Sarasvati faith of Itsukushima Shrine was folk belief of people for the happiness and prosperity, and this did not lead to an act of God, a festival of Itsukushima Shrine.